



エッセイ

理系と文系の分かれ道

環境企画 松村 眞

発行日

2013.8.16

日本では高校3年になって大学に進学しようとする時、誰もが大きな分かれ道にぶつかる。道標には一つが理数系、もう一方には文科系と書かれているが、その先は書かれていない。だから18才の若者には、その先がどこに行くのか想像できないし、自分がどちらに向いているのかもわからない。わからなくても、どちらかに決めなければならないから、親や先生の意見を参考に決めることになる。それに本人は、どちらの道であろうと将来を決める最終的な選択ではなく、途中で変更も可能だと思っている。それもそうであろう。まさか18才の選択が、数十年にもわたる職業に決定的な影響を与えるなどと誰が想像できようか。しかし、それぞれの道は一方通行でバイパスラインはない。だから一方の道を歩み始めたら、途中でもう一方の道に移ることはできない。では、どのような動機で進路を選び、その結果、どのような職業人になり、社会的にはどのような評価が待ち受けているのであろうか。

私は約40年をエンジニアとして働き、すでに現役を退いているが、私が理数系を選んだ理由は二つある。一つは国語や社会など文科系の成績が悪く、理数系の方がましだったからである。英語の成績もよくなかったが、単語を覚えるのが苦痛で勉強する気がしなかった。社会科では歴史上の人物や、出来事の年号を覚えるのが苦手だった。それに比べて理数系の科目は覚えることが少なく、試験では問題を見てから考えればよかったから、とくに勉強をしなくても平均以上の点が取れた。今思うと「記憶能力」が薄弱で、「思考能力」の方がましだったのではないかと思う。もう一つの理由は、将来の職業を思うと、理数系の方が「食いつぶれがない」と考えたからである。

だが、この二つの選択基準は適切だったであろうか。理数系の試験の成績がましだったとしても、単に「覚える」勉強が嫌いだったからで、潜在能力が理数系に向いていたかどうかは別の問題ではないか。「食いつぶれがない」という理由も、数十年にもなる職業生活に関連するなら、あまりにも実利に重きを置いた短絡的な発想ではなかったか。そこで今も多い理数系の友人に、「なぜ理数系を選んだのか、今が18才で分かれ道に立っていたら、どちらの道を選ぶのか」聞いてみた。Aさんの答えは単純で、理数系の学科の方が好きだったからだという。そして、今が18才で岐路に立っていても理数系を選ぶという。Bさんは上の兄が理数系で、面白そうだから自分も理数系を選んだという。CさんやDさんも理数系が好きだったから選んだとのことである。私のように国語や社会科が苦手だったからでも、「食いつぶれがない」と考えたからでもないようだ。よく考えると、私も子供

の頃から機械が好きだったことは確かである。時計の中がどうなっているのか知りたくて、当時は貴重だった目覚まし時計を分解して壊してしまった。小さなゼンマイを、どうしても元に戻せなかった悔しさを今でも覚えている。夏休みには、模型飛行機や模型自動車など必ず動く物を作っていたから、やはり理数系が好きだったのかもしれない。

一方、文科系を選ぶ人はどんな動機で決めるのであろう。そこで文科系を選んだ複数の友人にも、なぜ文科系を選んだのか聞いてみた。その結果、文科系が「好き」だから選んだという人はいなかった。代わりに、理数系よりも文科系の方が発展性があると思った人と、理数系が苦手だったからという人がいた。文科系を選んだ動機に、「文科系が好き」という理由がないのは興味深い。これは私見だが、「理数系」の職業は何かを設計したり、工場で何かを製作する地味な職人のイメージがある。一方、「文科系」は職業との関連性が希薄なだけに、理数系より幅が広く、将来の自由度が大きく見えるのではないだろうか。

さて、このような動機で理数系と文科系の卵が生まれるのだが、大学に進学しても教養課程では、理系も文系も大きな違いはない。教科は語学や数学などの基礎学科と、社会科学の科目が多かったと思う。しかし大学も専門課程に入ると、二つの道は大きく分かれていく。理数系は教材や参考書に図表や数式が多くなり、実験や演習が増え、絶えずレポートの提出を求められるので多忙になる。趣味やアルバイトにうつつを抜かすと、単位を取り損ねて落第する。でも多感な青年時代だから、理数系以外の分野に興味を抱いて傾倒する者も出る。私の友人にはギリシャ神話に熱中して落第した者もいれば、政治に関心が強くなり学生運動に身を投じた者もいる。このように多少回り道をする者もいるが、大部分は順調に専門課程を経て、エンジニアの「ひよこ」になり卒業を迎える。理数系の場合、概して就職に悩むことは少ない。なぜなら専門課程で学ぶ内容が、分野ごとの職種に結びついているからである。理数系の専門課程は職業専門学校の性格に近く、スペシャリスト予備軍の養成課程といってもよいだろう。それだけに就職に際して、選べる会社や職種の範囲が狭い。企業側も採用したい専門職ごとに、必要な基礎能力を確認して採用する。

一方、文科系はどうか。理数系と大きく違うのは、専門課程に進んでも学ぶ内容が職業や職種と結びついていないことにある。カリキュラムは、理数系のように職種に求められる「仕様書」に沿った内容ではない。このため、就職に際しても職種別の採用がほとんどない。学ぶ内容が職種と結びつかないから、企業に入社しても専門職になる道はなく、営業や総務などの一般職になる。大学に進学した「理数系と文科系の卵」は、卒業時にはスペシャリスト予備軍とゼネラリスト予備軍という、違った「ひよこ」になって巣立ちの時を迎えるのだ。では、社会に出た2種類の「ひよこ」は、その後、どのような環境でさらに成長し、どのように評価されるようになるのであろうか。

理数系の職業は原則としてスペシャリストだから、製造業や建設業に就職し、多くは工場や現場が仕事場になる。実務は同じ分野の先輩から学ぶことが多いし、チームワークではコミュニケーションの相手も関連分野の技術者が多い。このため、職場では連帯感が高まり、知識と価値観の共有化が進む。一方、専門職集団だからゼネラリストとの接点は希薄になり、ともすると興味や知識の範囲が狭く限定的になりやすい。たとえば設計と製作に精通しているエンジニアが、製品の販売や流通には全く関心を示さず、知ろうともしないことがある。「ひよこ」は実務経験を積んで一人前になるのだが、注意しないと専門能力が高くても幅が狭く、柔軟性や適応能力の低い技術者になる可能性があるのだ。原因の一つには、技術の高度化にともなって、専門職分野の細分化が進んだ影響もあると思う。

では文科系出身のゼネラリストはどうか。彼らは自分が専門職でないことをよく知っているから、販売部門でも流通部門でも、会社が決めれば従順に従う。特定の職種に「思い入れ」がないから、配属先の異動にも抵抗がない。仕事の内容は、スペシャリストに比べて浅いけれども広い。それだけに勤続年数が長くなると、配属部門だけでなく会社全体の状況を把握できるようになる。配属部門にも「思い入れ」がないから、部門の立場よりも会社全体を考慮した総合的な判断力が向上する。一方、実務経験の蓄積が職能の向上と直結しないので、概して個人としての存在基盤が弱い。勤続年数が長くなれば社内価値は高まるが、他社でも通用する市場価値を高めることができない。このため中高年で転職（転社）すると、蓄積した情報や人脈が通用しないから、専門職に比べて処遇の面で不利になりやすい。最近では定年延長や再雇用が広まっているが、私の知る限り再雇用の機会も理数系の方が圧倒的に恵まれている。私が理数系を選んだ動機の「食いつぱぐれがない」という理由は、ビジネス分野の現状が実態で証明していると思う。

最後に結論を導こう。理数系と文科系の分かれ道は、スペシャリストとゼネラリストの岐路である。スペシャリストは職人だから、プライドとモチベーションに意義があるが、意識して努力しないと視野が狭くなりやすい。キャリアを重ねるほどに、状況への柔軟な適応能力が大切になると思う。ゼネラリストは、一般的に柔軟性と適応性に優れており、コミュニケーション能力も高い。しかし、社内価値に大きく依存する存在基盤には不安が残る。企画能力でも組織管理能力でも構わないが、意識して普遍性や市場性のある能力の向上を目指すのが有益であろう。なお、「今が18才で進路選択の岐路にいたら、どちらの道を選ぶか」という設問に、理系の友人は5人のうち2人が文系を選ぶという意見だった。私も理系を選んで後悔はしていないが、もう一度チャンスがあれば別の道に行ってみたい。本当は二つの道にバイパスラインがあり、進路変更や協働作業の機会がもっと多い方がよいと思っている。そうなれば、理系と文系の長所を兼ね備えた人材が増えるのではないだろうか。なお、理系と文系という二分法は欧米には存在せず、日本独特の分類のようである。歴史的な経緯があるのだろうが、変革の余地があると思う。 (おわり)